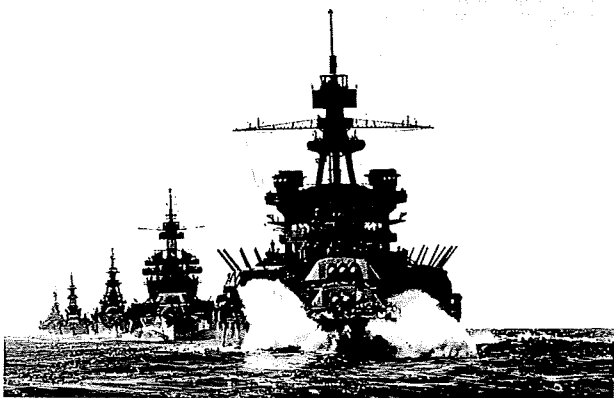
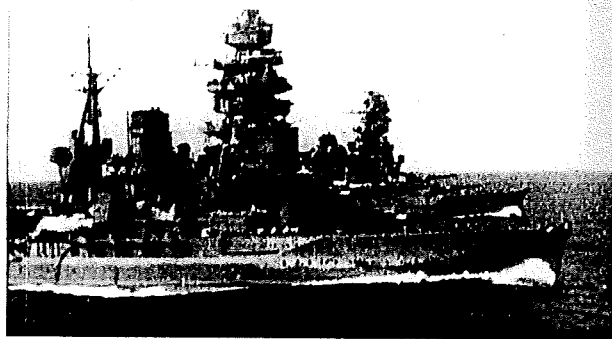


# 仮想戦記 日米艦隊決戦

WAR SIMULATION — DECISIVE FLEET BATTLE BETWEEN JAPANESE AND U.S. NAVIES by Yoichi Hiram

平間 洋一

(元防衛大学校教授・海将補)



↑陣形運動中の戦艦陸奥(手前)と伊勢。

←単縦陣で航行する米戦艦群。先頭はペンシルヴェニア Pennsylvania BB-38で、コロラド Colorado BB-45以下4隻が続航している。(U.S. NAVY)

## はじめに

何でもよいから自由に面白く仮想戦記を書いてとの依頼なので、読者の皆様も私と一緒に連合艦隊司令長官になった気分、戦艦長門や大和の艦橋に立って日米艦隊決戦を考えてみませんか。しかし、フィリピンとマレー、その後のスマトラ上陸作戦などの南方諸作戦は石油確保のため実施すること、また連合国の兵力は開戦8日前に軍令部が推定した「米英蘭豪の東洋所在海軍兵力表」とおりとする。この数値は実際より多いが、山本長官などがこの数値で作戦を計画したのだから、この数値を基に計画を立てていただきたい。

この作戦構想図や連合国の兵力表を一見しただけで、

兵力不足と戦う正面の大きさに目がくらみ、山本長官の「一大将ヲシテ言ハシメレバ……カカル成算少ナル戦ハナスベキニ非ラズ」との心境が痛いほど分かるが、命じられれば勝敗や生死を無視し戦うのが軍人の務めである。諸兄姉は私と一緒に連合艦隊司令長官〇〇大将になったつもりで、開戦初頭の日米艦隊決戦を考えて下さい。

## 米海軍の作戦計画と実施予定

ハワイ奇襲を計画せず米太平洋艦隊を迎え撃つ場合に米海軍は、どのように動いたであろうか。キンメル太平洋艦隊司令長官は1941年9月9日に、太平洋艦隊作戦計画(レインボー5号・Wppac-46)を麾下部隊に令達したが、その部隊編成は第2表とおりであった。

第1表 米英蘭豪の東洋所在海軍兵力表

\*戦史叢書「大本営海軍部連合艦隊2」より

国名	艦隊・部隊名	所在地	戦艦	空母	巡洋艦	駆逐艦	潜水艦	その他
アメリカ	極東艦隊	マニラ			重1, 軽1	14	17	17
	太平洋艦隊	ハワイ	11	5	重16, 軽14	84	30	52
イギリス	東インド艦隊	コロンボ ボンベイ	2	1	重6	6		6
	東方艦隊	シンガポール 香港	2	1	軽5	6	1	26
オランダ					5	3	19	
オーストラリア					重1, 軽5	4		7

また太平洋艦隊の任務はミッドウェー、ジョンストン、パルミラ、サモアを防御し、マーシャル諸島における要地(エニウェトク環礁)の使用封止と占領および敵の海上交通破壊戦と、要地に対する攻撃により敵勢力をマレー半島から牽制し連合国を支援する。また、カロリンおよびマーシャル諸島方面を偵察、奇襲、占領し、艦隊の前進拠拠地をトラックに設定する準備をするとしていた。

太平洋艦隊の作戦計画によれば、J日(対日戦争勃発日)に第2任務部隊に第3任務部隊の空母(サラトガ)を編入し、J+1日後に真珠湾を出撃しJ+6日ないし9日後にマーシャル諸島を偵察する。偵察終了後にいったん退避し、開戦J+5日に攻撃する第1任務部隊の戦艦6隻と、空母2隻に護衛された海兵隊をとまう第3任務部隊と合同し、開戦13日後にはマーシャル群島の攻略を開始するとしていた。

キンメルはマーシャル諸島が攻撃されたとの報告を受ければ、山本は8日後には出撃しトラックで給油し北上、開戦15日か17日後には遭遇戦が生起するであろうと判断していた。航空兵力が劣勢ではあったが、戦艦第一主義者でパイロットを「囃(フライ)ボーイ」と軽視していたキンメルは、この航空劣勢でも壊滅的な打撃を受けるとは考えていなかった。

この海戦の結果は当時の日本海軍の実力では、空母を含め戦艦の大部分が撃沈されたのではないかと。なぜならば当時の太平洋艦隊はイギリスを支援していたため、航空機や弾薬、特に航空魚雷とその整備機材が大幅に不足していた。またヴィンソンやスターク建艦法などにより艦艇の建造が急ピッチで進んでおり、太平洋艦隊から艦長や先任将校、ベテランの下士官が引き抜かれ、さらに

景気の上昇で民間の給料が高騰し、満期隊員の再服務希望者が激減していた。1941年4月に本土以外で満期を迎える隊員の再服務指示が出されていたが、太平洋艦隊の艦艇乗員の25パーセント以上が1年未満の新兵で占められていた。

このためリチャードソン司令長官は「艦隊は戦闘が出来る状態ではなく、艦隊のハワイ残置は敵前に餌を置くようなものである。今、戦うべきにあらず」と海軍首脳を強烈に批判し、ルーズベルト大統領としばしば衝突したため1941年2月に罷免されていた。

## 第1回日米艦隊決戦

私は山本司令長官のような能力もないし、黒島亀人参謀のような異彩ある参謀にも恵まれていないので、ハワイ奇襲は行なわず、学校で習い訓練してきた遊撃漸減作戦で開戦の火蓋を切ることとした。次に私の計画を説明するが、その前に山本長官の開戦時の連合艦隊の編成(第3表参照)を見てみたい。

この少ない兵力で日米艦隊決戦を戦うとなると、全般作戦支援などと瀬戸内海に待機している主力部隊の低速の戦艦6隻や小型旧式の空母鳳翔、改装空母の瑞鳳も引き連れて行かねばならず、さらに馬來部隊と比島部隊から2個水雷戦隊と2個航空戦隊を引き抜き、代わりに第5航空戦隊(翔鶴、瑞鶴)を渡した。また第1潜水戦隊をハワイ湾口付近に、第2、第3潜水戦隊の22隻をハワイ周辺から小笠原列島線の外側に数列に配備し、機動部隊は古仁屋湾に高速戦艦部隊と水雷戦隊はトラック島およびパラオに待機させ、潜水艦からの情報を見て攻撃することとした。

この兵力で遊撃漸減作戦を行なった場合、最初の日米

第2表 キンメルの太平洋艦隊作戦計画による部隊編成

第1任務部隊(戦闘部隊)	戦艦6隻, 空母サラトガ, 巡洋艦戦隊(軽巡4隻)
第1水雷戦隊	旧軽巡4隻, 駆逐艦18隻
第2任務部隊(戦闘部隊航空機群)	戦艦3隻, 空母ヨークタウン, 第5巡洋艦戦隊(重巡4隻, 旧軽巡1隻), 第2水雷戦隊(旧軽巡1隻, 駆逐艦8隻)
第3任務部隊(索敵部隊)	重巡3隻, 空母サラトガ(欠), 駆逐艦18隻
第7任務部隊(潜水艦部隊)	潜水艦30隻, 旧式・機雷潜水艦3隻

第3表 開戦時の連合艦隊の編成

主力部隊 (瀬戸内海)	戦艦6, 空母2, 軽巡2, 駆逐艦11
機動部隊 (ハワイ・ミッドウェー奇襲)	第1航空戦隊 (加賀, 赤城), 第2航空戦隊 (蒼龍, 飛龍), 第5航空戦隊 (翔鶴, 瑞鶴), 駆逐艦 (秋雲)
支援部隊	第3戦隊 (戦艦比叟, 霧島), 第8戦隊 (重巡利根, 筑摩)
警戒隊	第1水雷戦隊 (軽巡阿武隈), 第17駆逐隊 (谷風, 浦風, 浜風, 磯風) 第18駆逐隊 (不知火, 霞, 陽炎)
哨戒隊	第2潜水隊 (伊号3隻)
ミッドウェー破壊隊	駆逐艦 (潮, 運)

艦隊決戦はどのように推移したであろうか。砲術の権威の黛治海軍大佐は、「日米海軍の決戦では彼等の戦艦が約2万メートルに接近する30分前には、水雷戦隊と巡洋艦隊が2方向から魚雷を発射し、十字線射線網を敵の戦艦部隊に被せ、これにより3から4隻が轟沈か大傾斜し、1905年5月27日の砲戦開始30分後のロシア戦艦オスラビア Oslabiaのように列外に落伍するであろう。

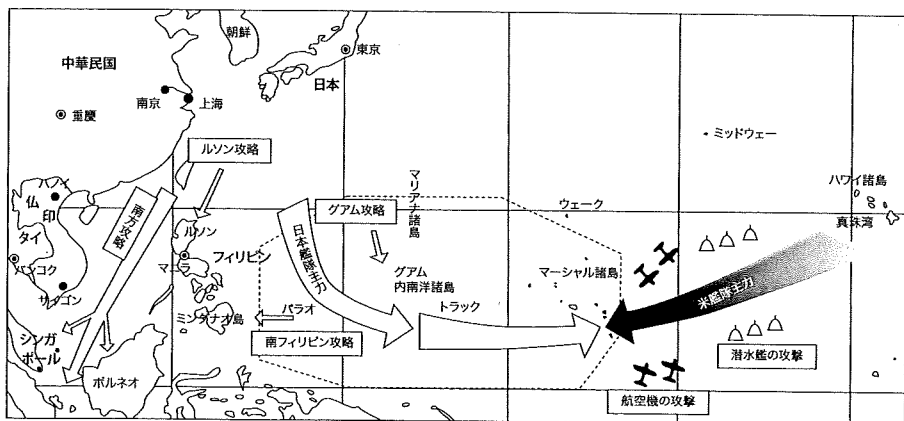
わが主力の第1戦隊と第2戦隊の6隻の戦艦は、米軍の10隻分の砲撃力を発揮し、また第3戦隊の金剛級4隻は6隻分の砲撃力で敵艦隊列の先頭に集中砲火を加えるが、命中率は2万5,000メートルで14パーセントで米海軍の3倍である。敵の重巡や軽巡は魚雷回避のため応戦できず、10分後に本来の針路に復しても距離は1万メートルで重巡の射撃距離には遠すぎ、その後も水雷戦隊の魚雷攻撃を受け致命的な打撃を受けたであろう。

空母部隊が相打ちになっても、術力上わが方が若干残存し、雷撃機が2から3隻の戦艦を落伍させるので、昭和17年秋まで洋上決戦が遊撃漸減作戦で行なわれていれば、わが連合艦隊は主力艦の砲力で米艦隊を第2のバルチック艦隊のように西太平洋に葬ったであろう。戦争

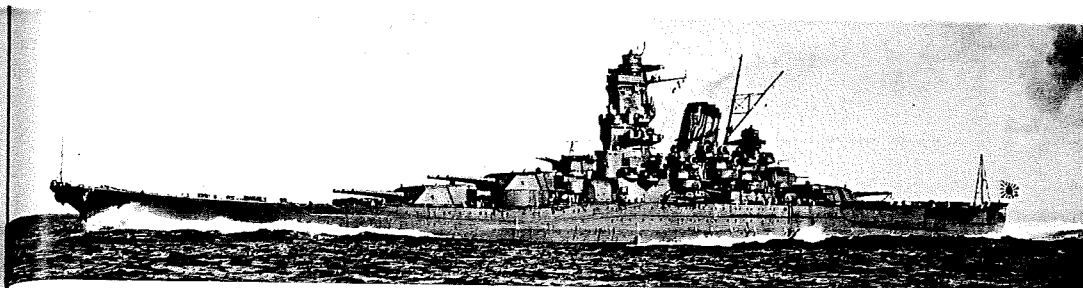
そのものの勝敗は原爆十数発整備後の問題として残るとしても…」と予想している。

遊撃漸減作戦による砲戦が採用されなかったのが、よほど無念だったのであろうか。黛大佐は山本長官が「我が3倍の命中率を知らず、洋上決戦に自信なしとしてハワイ奇襲の航空作戦に出た」と、著書『海軍砲戦史』に書き、その表紙に「砲將東郷砲を愛して大勝し、空將山本砲を侮って大敗す」と書いている。

たしかに日本海軍の命中率は米海軍を引き離していた。データは古いが1933年にカリフォルニア南部の日本移民の農園で、サンペドロ沖の戦闘射撃中の無線通信を傍受し、1935年春にはワシントン駐在の山口多聞大佐が米海軍少佐から『米海軍砲術年鑑』を、また同時期に別のルートで『米海軍大学校通信教科書』を入手し、これらの情報から砲術学校では米艦隊の決戦距離は1万8,200メートルから2万2,000メートルで、一斉射撃の弾着散布界 (遠近) は平均800メートル (当時の日本海軍の散布界は250メートルから300メートル) で、この数値は射撃距離2万メートルで平均命中率3パーセントを意味していた。一方、1941年11月20日に戦艦金剛と榛名が行なった訓練射撃の命中率は、平均射距離2万



昭和16年 (1941年) の作戦構想図



1941年10月、公試中の戦艦大和。

5,000メートルで14パーセントであった。

そのうえ日本海軍は射程3万メートルの酸素魚雷 (米海軍は8,000メートル) を保有し、さらに日本海軍には直衛機による妨害はなかったが、インド洋作戦では巡洋艦に88パーセント、空母に89パーセントの命中率を誇る母艦航空部隊や、最新鋭の戦艦プリンス・オブ・ウェールズ Prince of Wales と巡洋艦リパルス Repulse を87機の中型陸上攻撃機で撃沈し、損害3機という高い技量の基地航空部隊を保有していた。特にプリンス・オブ・ウェールズは1941年3月に竣工した最新鋭戦艦であり、対空武器は13.3センチ対水・対空両用砲16門、縦横5列に銃身を並べた40ミリ8連装対空機銃 (ポンポン砲) 4基、40ミリ・ボフォース機銃10門、20ミリ・エリコン機銃10門、12.7ミリ機銃16丁と、当時としては世界最強の対空武器を装備していたので、最新の対空武器に欠けた旧式な米艦隊ならば間違いなく2~3隻は撃沈していたであろう。

しかし、日本海軍がシナリオどおりに近接し、勇猛果敢な攻撃を仕掛けたであろうか。貧乏海軍の兵力温存主義が出なかったであろうか。開戦初頭のジャワ沖海戦では優勢であるにもかかわらず遠距離砲戦と魚雷戦に終始し、「搭載弾ノ大部分ヲ打ち尽くシ」ながら一隻も撃沈できなかった。また1943年3月のコマンドルスキー沖の海戦 (アッツ島沖海戦) でも、優勢で一時は重巡ソールト・レイク・シティ Salt Lake City CA-25 を航行不能にするなど有利に展開していたが、近接戦闘を避け4時間にわたる超遠距離射撃で、2,141発の砲弾と43本の魚雷を発射しながら命中弾は7発 (命中率0.33パーセント)、魚雷の命中はなく一隻も撃沈できないという

前代未聞の臆病な戦いを重ねていた。

### 大和とアイオワの巖流島

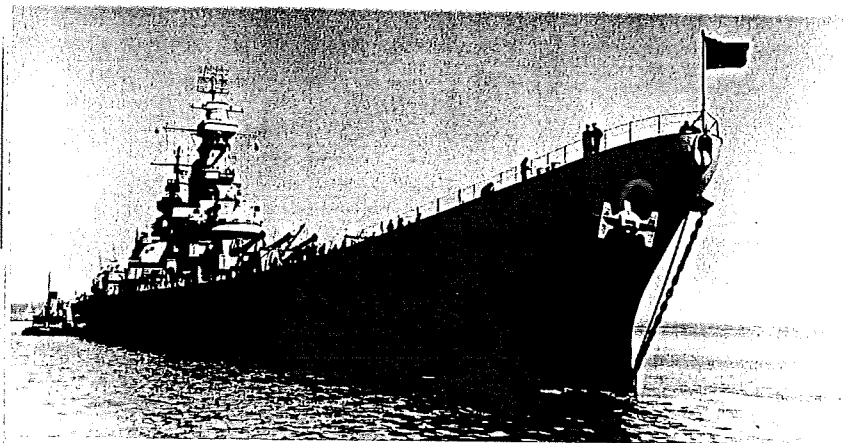
世界最強の日米の戦艦対決を想定しなければ特集『海上王戦艦の時代』の購読者が落胆するので、大和とアイオワ Iowa BB-61 の洋上決戦をサービスのために書くことにするが、これは米海軍のシナリオから見てみたい。

大和が世界最大の戦艦であっただけにアメリカの海軍関係の雑誌は、しばしば大和とアイオワの対決を掲載しているが、「U.S. Naval Institute Proceedings」(1983年7月号) はスリガオ海峡を出た武蔵を失った栗田艦隊と、ハルゼーが編成を予告したが編成しなかった戦艦などの水上部隊の第34任務部隊と、護衛空母部隊がサマル沖で出会い頭に遭遇する仮想戦記を掲載している。それによると、戦艦ニュー・ジャージー New Jersey BB-62 乗艦のブルとの異名があるハルゼー司令官は、護衛空母群から栗田艦隊発見の報告を受けると、TG38.2とTG38.4から引き抜いた戦艦6隻と重巡4隻、駆逐艦8隻を率いてサマル島に向首するが、33ノットで新戦艦アイオワとニュー・ジャージーで先行し、レーダーで栗田艦隊を探知すると、大和を2戦艦で挟むように針路をとるであろう。

一方、栗田司令官は米艦隊を発見すれば大和を先頭に長門、榛名、金剛で単縦列を成形し、射程が4,000ヤード長い大和が最初に発砲。米艦は射撃可能距離に到着する前に大和の10斉射を受けるが、遠距離であり、射撃装置が劣るので命中弾はない。その後低速27ノットの戦艦ワシントン Washington BB-56、アラバマ Alabama BB-60、サウス・ダコダ South Dakota BB-

第4表 大和とアイオワの主要目比較

	大和	アイオワ	
基準排水量	64,000トン	49,000トン	
全長	263メートル	270メートル	
全幅	38.9メートル	33メートル	
速力	27ノット	33ノット	
主砲	45口径46センチ3x3	50口径40センチ3x3	
装甲板	主砲塔	650ミリ	431ミリ
	水線	410ミリ	307ミリ
	甲板	230ミリ	223ミリ
	司令塔	500ミリ	444ミリ



竣工直後の戦艦ア  
イオワIowa BB-61。  
(U.S.NAVY)

57, マサチューセッツ Massachusetts BB-59 が加われ  
ばアメリカ側の大口徑砲は54門となるが、栗田艦隊の  
砲数は46センチ砲9門, 41センチ砲8門, 35.6センチ  
砲16門の合計33門しかない。

ハルゼーは単縦列の栗田艦隊を左右から挟んで日本の  
砲火を二分し、アイオワとニュー・ジャージーが左右か  
ら大和を、ワシントン級1隻とサウス・ダコダ級3隻が  
長門と金剛の旧式戦艦を攻撃、さらに栗田には前日と同  
様に350機の航空攻撃が加わるが、日本の8隻の巡洋艦  
は中口径砲で、11隻の駆逐隊は優れた魚雷攻撃で必死  
に奮闘し、ガダルカナルの戦いでは魚雷が致命的打撃を  
与え、中口径砲も艦橋などの上部構造物に深刻な被害を  
与えており、日本の巡洋艦や駆逐艦が米艦隊に大被害を  
与えた可能性もなくはない。

しかし、54門対33門の大口徑砲の差は大きく、最終  
的には大和は抵抗力を失い最後は駆逐艦の魚雷により撃  
沈されるとシナリオを結んでいる。

また"U.S.Naval History" (2005年12月号) はアイ  
オワと大和の一騎打ちを掲載し、アイオワの弾丸重量は  
1,225キロで最大射程は38,720メートル、大和の弾丸重  
量は1,460キロ、最大射程42,000メートルで、射程では  
大和が優れているが、発射速度は大和の45秒1発に対し  
て30秒1発であり砲弾の破壊力ではほぼ同等である。し  
かし、レーダーと連動した射撃装置を装備したアイオワ  
は光学測距儀の大和を圧倒し、アイオワが夜間とか雲な  
どを利用してレーダー射撃を行ない、大和が光学的測距  
可能距離に近づけば優速を利用して大和の測距可能外に  
退避し、レーダー射撃を続ければ大和に勝ち目はなし。  
しかし大和を沈めることはできないと書かれている。

たしかに大和や武蔵が沈没したのは魚雷であり、大和  
は米軍の調査では9本から12本、爆弾4発(日本側調  
査は魚雷8本と爆弾5発)、武蔵の場合は両舷であるため  
魚雷21本、爆弾8発であったことを考えると、アイ  
オワがいくら大和に打ち込んでも沈没することなくヨタ  
ヨタと奥に帰投し、沈められるとしたらピキニの原爆突

験の長門と同じ運命をたどったのではないだろうか。

\* \* \*

大和とアイオワの対決のシナリオを紹介したが、第1  
回艦隊決戦を遊撃斬滅作戦で迎え撃ったとしても、南方  
作戦への米艦隊の妨害は阻止できたので作戦目標は達せ  
られ、しかも米国民を立ち上がらせることはなかったの  
ではないか。

真珠湾奇襲の報告を受けるとスチムソン陸軍長官は  
「これでアメリカ国民はすべて結束する」と日記に書き、  
ノックス海軍長官は「もはや1秒たりとも逡巡する暇な  
し、海軍よ決起せよ」との電報を發した。ハワイ奇襲が宣  
戦布告なき卑怯な閣議と敵愾心を高め、自国の防衛にバ  
イタルでない対日戦争に長期間、国民が耐えられるかとい  
う米海軍が常に悩んでいた問題を一瞬にして解決し、米海  
軍のみならず全国民を立ち上がらせ3年9カ月も戦わせて  
しまったことを考えると、遊撃斬滅作戦に固執した凡将の  
判断も捨てたものではなかったのではないか。

それにしても、なぜアメリカ人は同時代に戦列に加わ  
ったワシントン級と比較せず、1.5年後に就役したアイ  
オワと比較したがるのであろうか、アメリカの友人に聞  
いたら「戦艦という艦種で世界一を比較するのだから、  
アイオワと比較するのが当たり前ではないか」というこ  
とであった。なるほど、そうかもしれない。しかし、そ  
こには何でも世界一でない気が済まないアメリカ人の  
国民性があるように思われてならない。

米海軍は大和級の砲身と防衛甲板を本国に運んだが、  
砲身は切断して破棄してしまった。そしてワシントンの  
海軍博物館には大和級の砲塔前面の打ち抜いた甲板(信  
濃用)と、それを打ち抜いた40.6センチ砲弾を目立つ  
ところに展示しているが、大和級の46センチ砲弾と比  
較されることを避けたいのであろうか私の僻みか、大和  
の砲弾はかなり離れた場所にポツンと置いてあった。

#### ◆参考文献

『戦史叢書 ハワイ作戦』、『戦史叢書 大本営連合艦隊  
(二)』、黒治夫『海軍砲戦史』、外山三郎『太平洋海戦史(II)』